

（「プロとしてのやさしさ」を 再考したい人へ）



《シリーズ ケアをひらく》

ケアってなんだろう

小澤勲 編著 A5判・300ページ

定価 2100円(本体 2000円+税5%) ISBN 4-260-00266-X 医学書院 2006

評者

水戸美津子

自治医科大学看護学部老年看護
学教授・看護学部長

ユニークな構成、異色の対談者

この本の構成はユニークだ。《少し長いまえがき》と《少し長いあとがきと「遺言」、そして感謝》の間に、4つのセクションがはさまれている。

第Ⅰ部は田口ランディ(作家)、向谷地生良(ソーシャルワーカー)、滝川一廣(精神科医)、瀬戸内寂聴(作家、僧侶)という異色の4人と小澤氏との対談である。第Ⅱ部は西川勝(看護師、臨床哲学)、出口泰靖(社会学)、天田城介(社会学)という3人の若手研究者によるインタビューと、彼らから小澤氏への果敢なる挑戦あるいは畏れともとれる論文が続く。第Ⅲ部は小澤氏自身の公開講座の記録、第Ⅳ部には「ほけ」をテーマにした文学作品を紹介した随筆風文章が並んでいる。

「技術としてのやさしさ」という卓抜な論点

読後、心地よく深い哲学的思考にとらわれた。「失われたケア」とでも表現したくなるほどの高齢者ケアの場——なかでも認知症高齢者のケアの場——のさびしい現状と、それとは反対に地味に黙々とさりげなく「やさしい」ケアを実践している数少ない人たちに思いを馳せた。まさに「ケアってなんだろう」と冷静に自問自答し、自分に課せられた職業人生の課題をも見出すことができるパワーのある本である。

小澤氏は、バランスのとれたケアを実践するには「感性を求めるのではなく、技術としてのやさしさを求めたほうがよい」として、次のように言う。

《いまは「感情労働」がひじょうに強く求められていますよね。それをひとことで言うと「やさしくあれ」ということだと思います。ただスタッフは、仕事がかうまいと、自分はやさしくない、ケアには向いていないというように思ってしまう人がいるんですよ。熱心であればあるほど》(p.147)

《どうすればやさしくなれるかという技術を伝えたいです。その人のかかえている不自由さをきちんと伝えて「そこでどうするかあなた考えてみて」と言いました。つまり感情労働としてではなく知的な労働としてやさしさをとらえていました。やさしさをやさしさとして求めるのではなく》(p.148)

つまり「介護・被介護という固い関係が一時でも解けて、直接的で暖かな人と人との関係が現出するケア」は、「技術としてのやさしさ」が成立したときに実現するのだろう。プロとしてのやさしさ、専門職としてのやさしさについて再考させられた。

久しぶりに元気が出る書物に出会った！

ケアを再考する大きな道筋を提示された気がして、久方ぶりに元気の出る書物に出会った。それは、内容のみならず本の装丁からも受けるもので、表紙の寺子屋の写真は読者に大きな余韻を残す。

対談・インタビューの部分は特に含蓄のある言葉が多く、意味を解釈するのにしんどい部分もあるが、プロとしてのケアを再考したい人にはぜひ読んでいただき、そしてじっくりと眺めてほしい一冊である。

■ご購入は、最寄の医書専門店または医学書院販売部 電話(03)3817-5657(直通)まで。
ホームページ(<http://www.igaku-shoin.co.jp>)からもお申し込みいただけます。